修士論文（要旨）
2016 年 1 月

役割語としての自称詞の使い分けの考察
―ストーリーマンガを資料として―

指導　堀口　純子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
214J3007
李　夢蝶

Master’s Thesis（Abstract）
January 2016

The Use of First Person Pronouns as Role Language in Different Contexts in Narrative Manga

Mengdie Li
214J3007
Master’s Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Sumiko Horiguchi

目次

第1章　はじめに　・・1
1.1　研究背景・・・1
1.2　研究動機・・・1
1.3　研究目的・・・2
第2章　先行研究　・・・3
2.1　役割語に関する研究・・3
2.2　役割語研究とメディア分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第3章　言語資料としてのストーリーマンガ作品　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
3.1　ストーリーマンガの定義と特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
3.2　ストーリーマンガの資料性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
3.3　対象作品の選択基準・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第4章　調査概要　・・・12
4.1　データとする文字情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
4.2　データ作成の流れ・・12
4.3　調査作品・・13
4.4　データ概要・・・16
第5章　自称詞の使い分けの全体像　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
5.1　自称詞の使用概況・・18
5.2　性別による自称詞の使い分け・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
5.3　年代別による自称詞の使い分け・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
第6章　談話における自称詞の使い分け　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
6.1　女性人物に用いられる「わたし」「あたし」と「わたくし」・・・・・・・・・・・・・23
6.2　男性人物に用いられる「おれ」「ぼく」と「わたし」・・・・・・・・・・・・・・・・28
6.3　男性人物に用いられる「あたし」と「わし」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
6.4　女児に用いられる自称表現・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
6.5　「親族名」に現れる人物像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
6.6　「じぶん」とは役割語？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第7章　総合的考察　・・・42
7.1　テクストにおける自称詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
7.2　作者に使われる自称詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
7.3　読者に向けての自称詞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
第8章　まとめと今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
8.1　まとめ・・・53
8.2　日本語教育への示唆と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
参考文献・URL・・-1-
出典・・-4-
添付資料・・Ⅰ

1990 年代から近年に至り，アニメ・マンガを主とする日本のサブカルチャーが世界中で大人気を博し，アニメ・マンガなどに対する興味・関心から日本語学習を始める学習者が年々増加しているが，それと同時に，アニメ・マンガを日本語教育素材として用いる可能性をめぐる議論も日本語教育界において展開されている[1]。アニメ・マンガなど創作作品において登場人物に用いられる言葉づかいの中では,「役割語」という表現形式が中心的に研究されている。役割語は特定の人物のイメージと特徴的に結びついている言葉づかいであり（金水 2003），作品に登場する様々なキャラクターの多様性を反映する。談話を行う環境（文脈）の変化により,「キャラクターごとの「らしい」しゃべり方」（定延 2011：17）は対応的に調整され，役割語としての各言語要素に豊かなヴァリエーションが現れる。創作作品を日本語教育素材として適切，且つ十分に利用するには，作品における具体的な場面に現れる言葉づかいのヴァリエーションを様々な角度から観察し，キャラクターごとの「らしい」しゃべり方が意味するところを明らかにする必要があると考える。

役割語的言語要素の中では,人称表現と文末表現は最も重要な指標とみなされているが,人称表現に対する研究はまだ深く展開されていない。本研究では，役割語の最も重要な指標の 1 つとしての自称表現に着眼点を置き，ストーリーマンガによって用いられる自称詞のヴァリエーションを観察した。主として，役割語研究の基本概念に基づき，作品における 1 対 1 の談話活動に現れる自称詞の使い分けとその表現効果を明らかにすることを目的とした。

調査対象としたストーリーマンガは，因（2005a）が述べた日本語教育リソースとして利用できるすぐれたマンガ作品の選択要件に基づき選び出したもので,「面白さとともに，内容や言語表現をじっくり分析するのに深さと広がりをそろえ」（因 2005a：135），我々の身の回りによくある話題を描写するリアリティーのある 6 つの作品である。作品における 1 対 1 の談話場面から，対象人物の発話を収集し，データとして整理した。

本研究のデータに現れた自称表現は,「わたし」「わたくし」「あたし（あたしゃ）」「おれ」「ぼく」「わし（わしゃ）」「じぶん」「実名・愛称」「親族名」の 9 種類である。本研究ではまず,各自称詞の使用人数から,作品に用いられる自称詞の使い分けの全体像を観察した。それに基づき，データに現れた自称詞の出現する発話例を元の談話に戻し，談話が行われる時の場面や人間関係などの様々な角度から，自称詞の使い分けを分析した。

その結果，9 つの自称詞が登場人物の性や老若の違いにより使い分けられている傾向が全体的に観察され，同じ〈女ことば〉・〈男ことば〉としての「あたし」「わたし」・「おれ」「ぼく」などが,登場人物の個性により使い分けられていることも明らかになった。また，談話が行われる文脈において，各自称詞が場面の正式度，話者同士の関係，ないし発話の時の態度・雰囲気により使い分けられていることも観察できた。

その使い分けの原因を自称詞に含まれている異なる意味合いから検討した結果，各自称詞が意味合い上の異なりにより使い分けられていると推察できた。登場人物それぞれのイメージが，発話に用いられる自称詞に潜んでいる意味合いにより醸し出されていることも分かった。各自称詞の意味合いにより描き分けられているイメージは，登場人物の一般的

---

[1] ①国際交流基金 2012 年度，日本語教育機関に対する調査結果による。

②また，鮎澤孝子・加藤清方 1995，熊本・廣利 2008，他の説を参照した。

な印象（強い男性像，優しい女性像など）であることもあるが，談話が行われている場面，参加者の関係，ないし一時的な雰囲気や態度の変化により現れる特定のイメージ（下位・上位者のイメージ，怒る・喜ぶ時のイメージなど）のこともある。このようにして作者が異なる意味合いを巧みに利用し，各自称表現を使い分けることにより現れる表現効果を，本研究では以下のようにまとめた。

〈1〉　それぞれの人物像を創り出し，描き分けること

〈2〉　談話場面および談話が行われる一時的な雰囲気をほのめかすこと

〈3〉　話者同士の間の親疎・上下関係，ないし作品における複雑な人間関係を紡ぐこと

〈4〉　談話活動における一時的な感情を醸し出すこと

これらの描写活動の中で，作者は登場人物に様々な談話の中で異なる自称詞を用いさせてそれぞれのイメージを構成し，各イメージを生き生きと作品外の読者に伝えようと発信する。自称詞を含む役割語の言葉づかいは，それぞれのイメージにふさわしいスピーチスタイルであり，いわゆる言語上のステレオタイプである（金水 2003，2008）。日本語社会で共有されている言語上のステレオタイプ的知識は，作品外における作者と読者の間のコミュニケーションを達成するためには必要不可欠だと思われる。作者は物語を効率よく展開するため，役割語としての自称詞を使い分け，各登場人物の特徴をステレオタイプ的に提示するのだが，読者はステレオタイプ的知識があればこそ，提示される自称表現から登場人物の特徴を的確に把握でき，ストーリーの展開に集中できるからである。

したがって，日本語教育においては，創作作品を日本語教育素材とする場合，日本語のステレオタイプ知識を作品の理解において必要となる一般知識として学習者に指導すべきであるし，また非母語話者の日本語指導者にも備えられるべきである。さらに，創作作品の虚構性や，作品の中で用いられる言葉づかいと実言語の運用の差を学習者に明瞭に提示する必要があると考えられる。今後の課題としては，創作言語と自然言語の差を追究するとともに，役割語的言語要素の組み立てにより現れる表現効果を検討していくことが挙げられる。

参考文献

鮎澤孝子・加藤清方（1995）「日本語教育における社会言語学的基盤の教育情報化－映像素材「となりのトトロ」を一例として―」『日本語教育における社会言語学的基盤に関する総合的研究』平成 6 年度 B 班研究成果報告書，文部省化学研究費総合研究

新井潤（2010）「女性語と役割語の日本語教育」遠藤織枝・小林美恵子・桜井隆（編）『世界をつなぐことば：ことはとジェンダー/日本語教育/中国女文字』三元社，333-345

加藤清方（2003）「教育資源としてのテレビ・アニメーション番組と日本語教育」『日本語学』22（12），明治書院，56-64

加藤清方（2007）「サブカルチャーと日本語教育」『學鐙』104（4），丸善，6-9

金田純平（2011）「要素に注目した役割語対象研究―「キャラ語尾」は通言語的なりうるか」金水敏（編）『役割語研究の展開』くろしお出版，127-152

金水敏（1989）「代名詞と人称」北原保雄編『講座　日本語と日本語教育 4』明治書院

金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店

金水敏（2008）「役割語と日本語史」金水敏・他（編）『日本語史のインタフェース』岩波書店，205-235

金水敏（2010）「「男ことば」の歴史―「おれ」「ぼく」を中心に」中村桃子（編）『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社，35-49

金水敏（2011）「現代日本語の役割語と発話キャラクタ」金水敏（編）『役割語研究の展開』くろしお出版，7-26

金水敏（編）（2014）『〈役割語〉小辞典』研究社

熊野七絵・廣利正代（2008）「「アニメ・マンガ」調査研究―地域事情と日本語教材―」『国際交流基金日本語教育紀要』20，広島大学留学センター，55-69

定延利之（2006）「ことばと発話キャラクタ」『文学』7（6），岩波書店，117-129

定延利之（2011）「キャラクタは文法をどこまで変えるか？」金水敏（編）『役割語研究の展開』くろしお出版，17-26

定延利之・澤田浩子（2007）「発話キャラクターに応じたことばづかいの研究とその必要性」『2007 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会，83-88

鄭恵先（2011）「役割語を主題とした日韓翻訳の実践―課題遂行型の翻訳活動を通しての気づきとスキル向上―」金水敏（編）『役割語研究の展開』くろしお出版，71-90

鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波書店

田窪行則（1992）「言語行動と視点―人称詞を中心に―」『日本語学』岩波書店

田窪行則（1997）『視点と言語表現』くろしお出版

因京子（2005a）「マンガで学ぶ日本語―日本語教育でのストーリー・マンガ利用の可能性」日下翠（編）『マンガ研究への扉』梓書院，133-153

三輪正（2005）『一人称二人称と対話』人文書院

山口治彦（2011）「役割語のエコロジ――他人キャラとコンテクストの関係―」金水敏編『役割語研究の展開』くろしお出版，27-47

参考 URL

国際交流基金：「2012 年度，日本語教育機関に対する調査結果」
http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/dl/survey_2012/2012_s_excerpt_j.pdf